

保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について

細井 香*・内海崎 貴子**
野尻 裕子***・栗原 泰子****

About an Infant Play Experience of a Childcare Person Training Course Student's Past

Kaori HOSOI, Takako UCHIMIZAKI, Yuko NOJIRI, Yasuko KURIHARA

要 旨

【目的】現在、子どもの遊びは縮小・喪失している。1970年代に比べ、遊び空間や遊び場、子ども同士で遊ぶ体験などが減少し、遊びの種類も、ひとり遊びや室内での遊びに変化していることが明らかとされている。遊ぶ体験や遊び場を確保することが難しい現代において、幼稚園や保育所で遊びを提供する保育者の役割は重要である。本研究では、保育者養成課程学生が、幼児期にどのような遊びを体験してきたのか、特に保育の場に限定し調査を実施した。今回の調査から、個々の遊びの経験差について把握することで、今後の実習指導における基礎的資料を得ることを目的とする。【方法】保育者養成課程の1～4年生の学生187名（男性61名、女性126名）を対象に、性別、通っていた保育機関（幼稚園、保育園別）、幼児期の居住地（都道府県）、記憶している遊びについて、アンケート調査を実施した。【結果および考察】遊びの種類は、屋外で24種類、室内で15種類あげられた。遊びの数の一人当たり平均は、屋外で男性4.3種類、女性4.6種類であった。また室内では、男性1.8種類、女性3.5種類と、若干性差がみられた。全体的には女性の方が多くの遊びを記憶している。屋外の遊びでは、男性で砂遊びやボール遊び、かくれんぼの回答が多く、女性では鬼ごっこ、伝承遊び、泥遊び、草花遊びなどが多くあげられ、また固定遊具での遊びが男性よりも多かった。室内遊びに関しては女性の回答が非常に多かった。

キーワード：遊び体験、保育者養成課程、幼児期、アンケート調査

*講師 幼児教育

**助教授 教育学

***助教授 幼児教育

****教授 幼児教育

1. 背景および目的

保育者を目指す学生は、その動機に自分自身の幼児期に通った幼稚園あるいは保育所での思い出を語る者が多い。幼稚園・保育所の実習に向けての授業において、幼稚園・保育所での遊びについて話をすると、非常に懐かしげにそのころを振り返る学生の姿がある。森の調査でも、子ども時代の思い出で多かった場面は、幼稚園・保育所での遊びの場面であった¹⁾。しかし、現在、子どもの遊びは縮小・喪失している。これを「子どもの危機」の一つであるとの見方をする研究者もいる²⁾。これまでも、仙田らにより、家庭や近所での遊びについて幅広い調査が行われてきたが、1970年代に比べ、遊び空間や遊び場、子ども同士で遊ぶ体験などが減少し、遊びの種類も、ひとり遊びや室内での遊びに変化していることが明らかとされている^{3)・4)}。子どもにとっての遊びは、身体の発達を促進するだけでなく、友達同士のかかわり（社会性）や主体的に環境とかかわることで創造性を養うことができる大切なものである。このように家庭や地域において、子ども同士で遊ぶ体験や遊び場を確保することが難しい現代は、幼稚園や保育所での「遊び体験」が、特に重要な役割を担っていると考えられる。

幼稚園や保育所は、このような要請にどのように対応しているのだろうか。幼稚園教育をめぐっては、1997（平成9）年に「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育のあり方について⁵⁾」、平成13年に「幼児教育の充実に向けて一幼児教育振興プログラムの策定に向けて⁶⁾」、平成14年には「幼稚園教員の資質向上について一自ら学ぶ幼稚園教員のために⁷⁾」などの報告書や答申が出されており、更に平成17年には「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について⁸⁾」が出されている。これらの内容からは、一貫して「遊ぶことを通して総合的に指導する」ことの重要性が述べられている。また、保育所保育指針においても、遊びは、乳幼児の発達に必要な体験が相互に関連し合って総合的に営まれていることから、遊びを通して保育することの重要性が強く述べられている⁹⁾。

平成に入り幼稚園教育要領の二度にわたる改訂があったが、なかでも平成10年の改訂時には保育者に関する事柄が加わり、人的環境としての保育者が果たす役割が大きいことを強調している¹⁰⁾。こういった状況の中で、幼稚園教員や保育士に求められる資質や技術、能力を、養成側が再認識することは重要であり、養成プログラムに反映することが求められている。

保育者養成過程の教育実習および保育実習の日誌やレポートをみると、学生の子どもの遊びを見る視点は、自身の幼児期の遊びの影響を大きく受けていることがわかる。このことから、記憶に残る遊びの風景は、学生の原点であり保育者としての遊び観に少なからず影響を与えているものと考えられる。パトリシア・クランプトンによれば、個々のもつ経験は、立ち戻

り、ふり返ることで、はじめて学習として獲得し、役割を果たすことができるとしている¹¹⁾。将来、保育者となり、遊びの伝承者となるであろう保育者養成課程の学生が、遊びの体験を振り返ることは重要である。

本研究では、保育者養成課程学生が、幼児期にどのような遊びを体験してきたのか、特に保育の場に限定し調査を実施することとする。これまでも、保育者養成課程の学生に、遊び体験について調査した研究はいくつか行われており^{12)~18)}、これらの結果と本研究の結果とを比較しながら、個々の遊びの経験差について把握し、今後の実習指導における基礎的資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査の目的

本調査においては、幼児教育専攻の学生が幼児期においてどのような遊びを行っていたと記憶しているのかを明らかにすることを目的とする。記憶されたものの中には、大人になってから想起されたものが何らかのフィルターが掛けられていることが考えられる。それは、学生に何らかのインパクト（ネガティブなものであれ、ポジティブなものであれ）があったものだろう。その想起された遊びに、どのような特徴があるのか、いくつかの要因からみていくこととする。

(2) 調査対象及び方法

保育者養成課程の1～4年生の学生187名に対するアンケート調査

(3) 調査内容

性別、通っていた保育機関（幼稚園、保育園別）、幼児期の居住地（都道府県）、記憶している遊びである。「記憶している遊び」関しての回答は、保育機関で行っていた遊びとして想起されるものを自由記述で求めた。

(4) 調査日時：2005年10月17日（月）

(5) 分析方法

自由記述内容から、園での行事や、保育者が設定しているような遊びは本調査の対象から除

外し、幼児の自由な遊びを選択抽出する。調査項目を分析の視点として、クロス集計を行い、学生の遊びの記憶に影響を及ぼしている要因を分析する。

3. 結果および考察

(1) 調査対象の属性

対象者は、表1に示したとおり187名であり、そのうち男性が61名(32.6%)、女性が126名(67.4%)である。表2には、学年別の人数を示した。1年次が最も多く103名(55.1%)、2年次が54名(22.9%)、3年次が25名(13.4%)、4年次が5名(2.7%)であった。保育機関別割合は、男性では幼稚園が84.9%、保育園が15.1%であり、女性では幼稚園が74.2%、保育園が25.8%であった。対象者の出身地域の分布は図1の地図に示したとおり、全国各地に広がっている。

(2) 遊びの数

性別にみた遊びの数の一人当たり平均値を表3に示した。遊びの種類は、屋外で24種類あげられ、室内では15種類あげられた。遊びの数の幅は、屋外では0から16種類、室内では0から9種類であり、記憶に残っている遊びの数は個人差がみられる。遊びの数の一人当たり平均は、屋外では、男性が平均4.3種類、女性は平均4.6種類であった。また室内では、男性が平均1.8種類であったのに対し、女性では平均3.5種類と、若干性差がみられた。全体的には女性の方が多くの遊びを思い出として記憶していることが分かる。

表4には、保育機関別にみた遊びの数の一人当たり平均値を示した。遊びの数の一人当たり平均は、屋外では、幼稚園が平均4.6種類、保育園は平均4.1種類であった。また室内では、幼稚園が平均2.9種類、保育園では平均3.5種類であった。この結果から、幼稚園出身者は屋外遊びを思い出として多くあげ、室内遊びに関しては保育園出身者の方が多結果であった。

しかし、今回の結果では全体的に記憶している遊びの数が少なく、実際の保育所や幼稚園で経験している遊びより少ないものと思われる。遊びの種類によっては、記憶に残りやすいものと、記憶に残りにくいものがあり、数だけで、遊びの経験値の高低を判断することはできないが、乳幼児期の楽しい遊び体験が基礎となり、楽しい遊びを伝えていけるのだとすれば、記憶に残っていない遊びを、より多く想起させるような授業展開を行うことが望ましい。

遊びの種類を量的に分析したものとして、栗原・野尻の調査などがあげられる¹²⁾。栗原らは本学の女子学生77名に対し、遊びの記憶を調査しているが、あげられた遊びの記憶の数は、

保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について

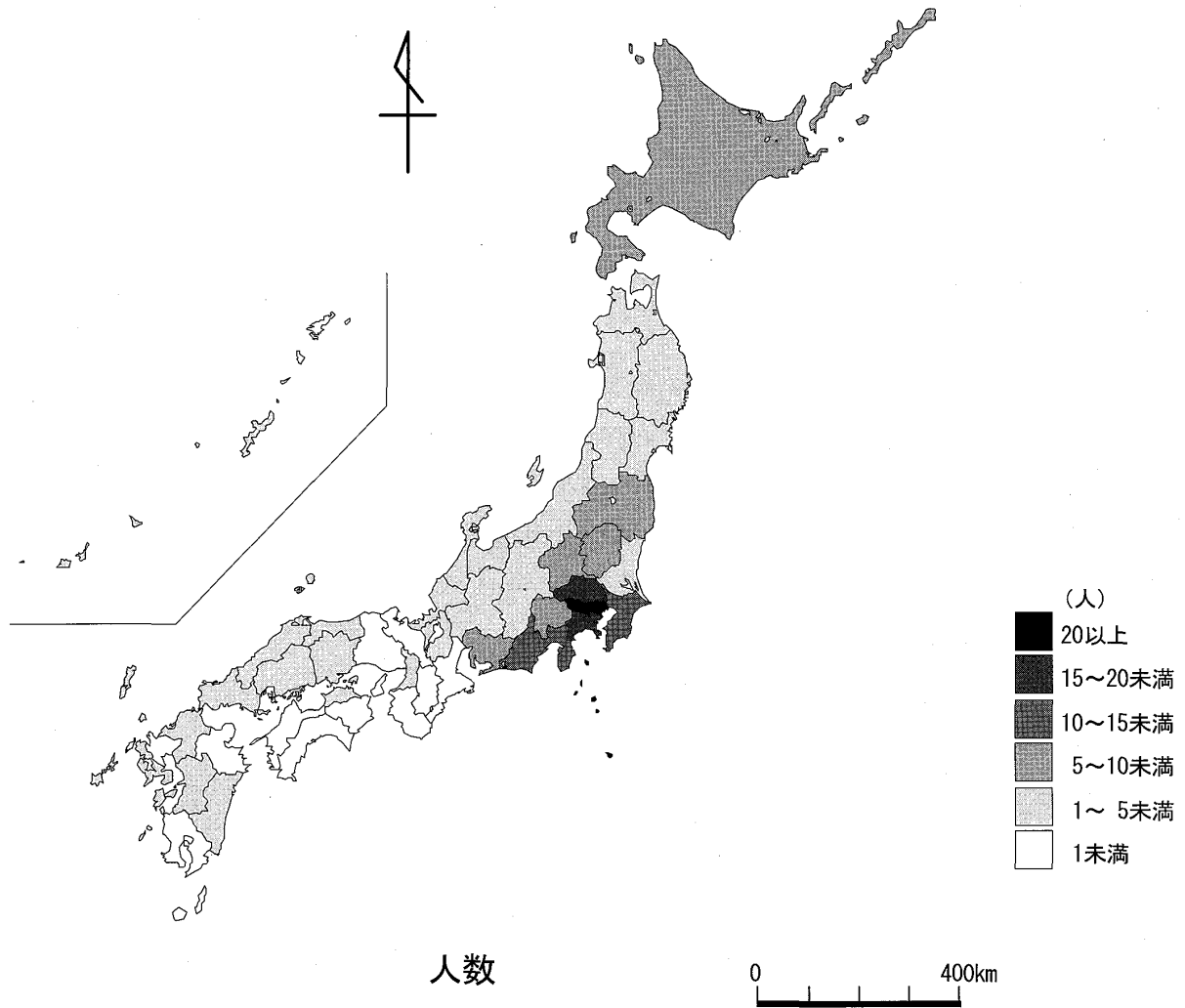


図1. 調査対象者の子ども時代の居住地分布

表1. 調査対象者の性別人数および割合

	N	%
男性	61	32.6
女性	126	67.4
合計	187	100

表2. 調査対象者の学年別人数および割合

学年	N	%
1年次	103	55.1
2年次	54	28.9
3年次	25	13.4
4年次	5	2.7
合計	187	100

表3. 性別にみた遊びの数の一人当たり平均値

	男性	女性
屋外 (24種類：0-16)	4.3 ± 2.8	4.6 ± 3.1
室内 (15種類：0-9)	1.8 ± 1.9	3.5 ± 2.3

表4. 保育機関別にみた遊びの数の一人当たり平均値

	幼稚園	保育園
屋外 (24種類：0-16)	4.6 ± 3.0	4.1 ± 2.4
室内 (15種類：0-9)	2.9 ± 2.2	3.5 ± 2.3

一人当たり 8.4 種類であり、今回の調査対象者の約 2 倍の結果を報告している。大学機関の違いによって、このように遊びの数に差がみられるということは、ある一定の養成機関の結果を、そのままあてはめることができないことを示している。

各養成機関が、幼稚園教員や保育士に求められる資質や技術、能力について再認識し、カリキュラムづくりを行っていくためには、それぞれの機関ごとに学生の遊びの経験差を把握し、学生の技術や能力にあった内容を提供する必要がある。

(3) 遊びの種類

性別にみた遊びの種類は、図2と図3に示したとおりである。屋外と室内に分類して性別傾向を見ると、屋外の遊びでは砂遊びやボール遊び、かくれんぼが男性からの回答に多いことが分かる。女性では鬼ごっこ、伝承遊び、泥遊び、草花遊びなどが多くあげられ、また固定遊具での遊びが男性よりも多かった。これらのうち、性別で有意な差のみられた項目は、ボール遊び ($p < .05$)、伝承遊び ($p < .05$)、草花遊び ($p < .05$) の3項目であった。

室内遊びでは男性が女性よりも多い項目は積み木、ブロックの遊びのみで、遊びの数の性別比較でも明らかなように、室内遊びに関しては女性の回答が非常に多かった。これらのうち、性別で有意な差のみられた項目は、ままごと ($p < .01$)、ごっこ遊び ($p < .05$)、お絵かき ($p < .05$)、折り紙 ($p < .01$)、粘土 ($p < .05$)、絵本・紙芝居 ($p < .05$) の6項目であった。

本研究結果は、岸本ら¹⁴⁾や森ら¹⁵⁾が行った、保育者養成課程の女子学生それぞれ433名、445名の結果とほぼ同様であった。彼らの調査の対象者は、それぞれ神戸や九州出身の女子学生であるが、本研究の対象者と、ほぼ同様の遊びを体験していた。このことから、遊びの種類に関する地域差は、特に見られないようである。

全体的に見ると、男子に比べて女子のほうが伝承遊びや草花遊び、固定遊具の遊びあるいはごっこ遊びなどの室内遊びが多かった。その理由としては、馬場が自ら実施した遊び調査の結果で、女子のほうが男子より遊びにおいて、保守的な傾向があるとの見解を述べている¹³⁾。ま

保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について

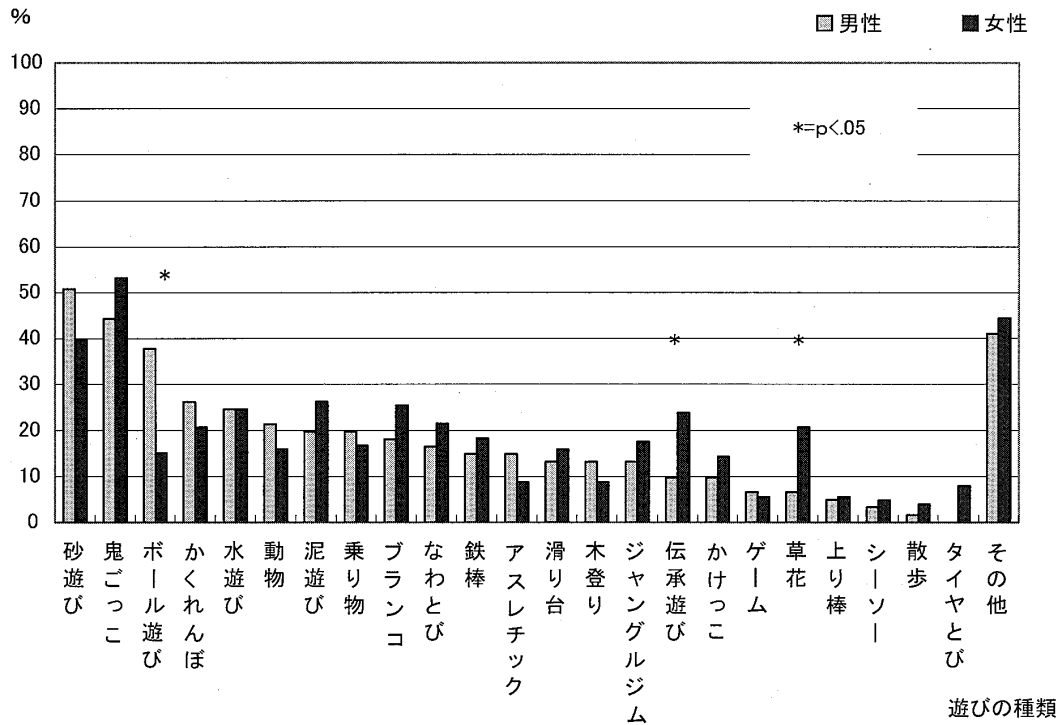


図2. 子どもの頃の屋外遊び (性別)

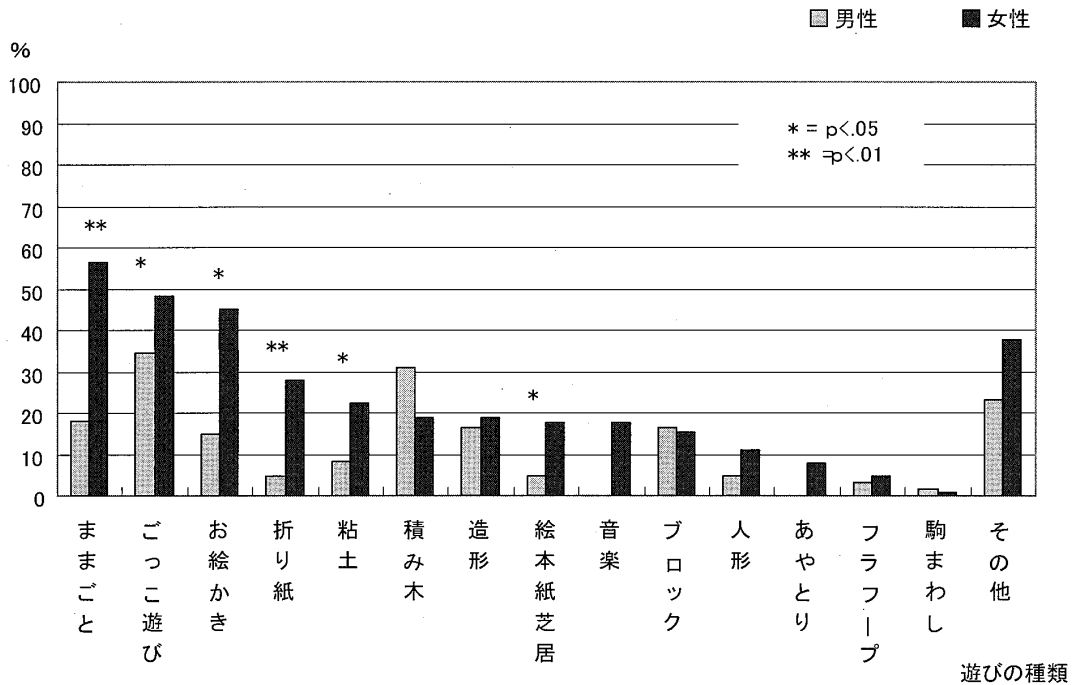


図3. 子どもの頃の室内遊び (性別)

た、今回の結果からは、自然遊びの体験が少ないように思われる。文部科学省の調査報告等で、自然体験が豊かな子どもほど、「道徳観、正義感」が身につけている子どもが多いとの報告もあり¹⁹⁾、今後、彼らが保育者となったときに、自らの自然体験を子どもに伝えられるよう、自然体験の機会がもてるようなカリキュラムづくりを検討したい。

次に、保育機関別にみた遊びの種類について、図4と図5に示した。まず屋外遊びを見ると、保育園では乗り物遊びやかくれんぼが幼稚園よりも多く、泥遊びや動物、固定遊具などでの遊びが幼稚園出身者から多くあげられていることが分かる。これらのうち、機関別で有意な差のみられた項目は、水遊び ($p<.05$)、なわとび ($p<.05$)、動物 ($p<.05$)、かけっこ ($p<.05$)、アスレチック ($p<.05$) の5項目であった。

室内遊びに関しては、遊びの数と保育機関の比較でも明らかなように、保育園出身者からの回答が多い。その内容を見ると、日常のちょっとした時間に繰り返し取り組むことが出来る活動（折り紙、ブロック）が多い傾向にあった。また、ごっこ遊び、ままごと、積み木、ブロック、あやとりといった自由な遊びが保育園出身者の回答に多かった。機関別で有意な差のみられた項目は、ごっこ遊び ($p<.05$)、折り紙 ($p<.05$) の2項目であった。これらの結果から、

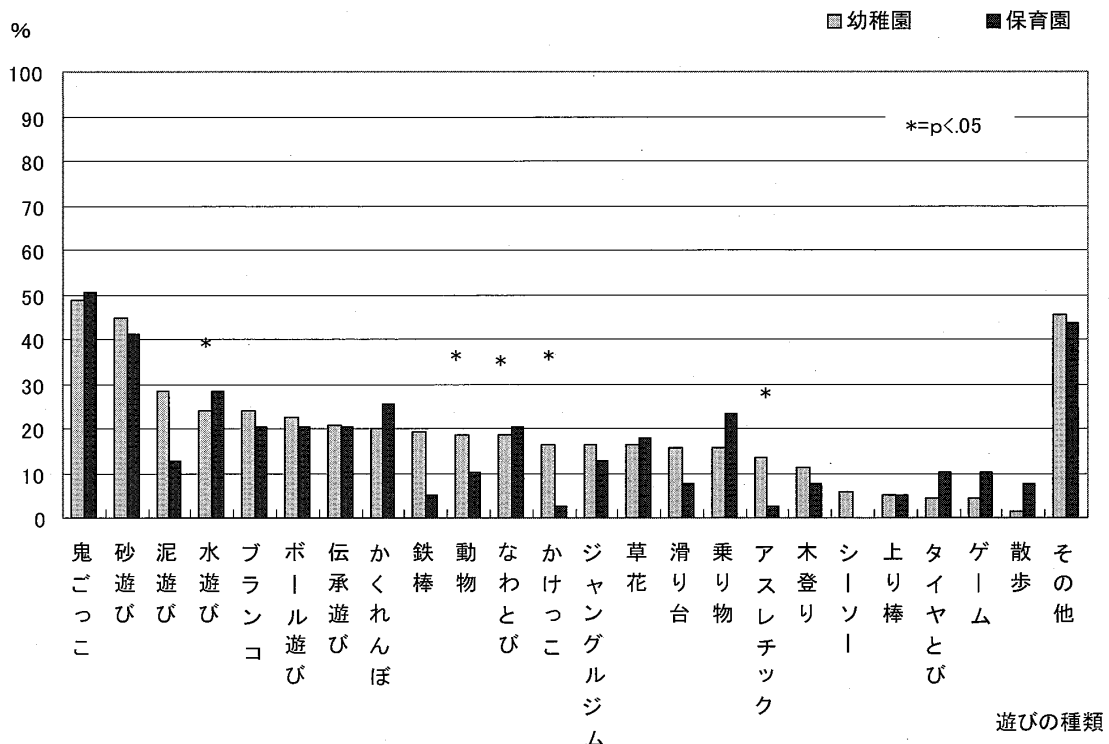


図4. 子どもの頃の屋外遊び（保育機関別）

保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について

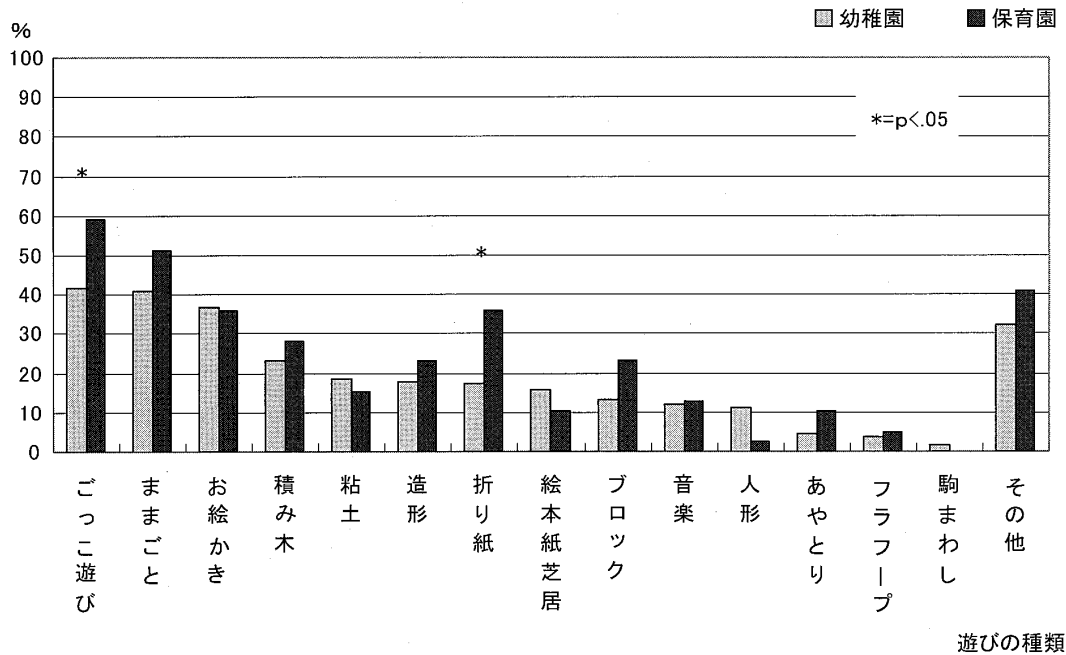


図5. 子どもの頃の室内遊び（保育機関別）

経験できる遊びの種類は、保育機関の設備や、保育形態の影響を受けていることが考えられる。

これまで、保育者養成課程学生の幼児期の遊びに関する調査研究は、場や年齢段階を限定していないものが多く、今回の調査のように、幼稚園や保育所における遊びの調査に限定したもので、統計的に処理されたものは少ない。

(4) 遊びの数に影響する要因の検討

最後に、屋外・屋内別に記憶している遊びの数と、各要因との関連について表5に示した。屋外・屋内別に遊びの数を従属変数、性別、保育機関、幼稚園および保育園在園年数を独立変数とした重回帰分析を行った結果、室内遊びで、性別と保育機関との関連がみられた。この結果から、屋外遊びの数に影響を及ぼす要因は認められなかったが、室内遊びでは、男性より女性のほうが、また幼稚園より保育園のほうが、室内遊びの数が多いことがわかる。

4. おわりに

本研究では保育者養成課程学生の幼児期の遊びの傾向を、思い出し記録の中から分析した。しかし調査対象者に偏りがあったため、地域差、保育機関間での性別差を検討するに至らな

表5. 屋外・室内遊び別重回帰分析の結果

	屋外遊び	室内遊び
項目	β (標準偏回帰係数)	β (標準偏回帰係数)
性別 (1:男性, 0:女性)	-.08	-.32**
保育機関 (1:幼稚園, 0:保育園)	-.03	-.39*
幼稚園在園年数 (連続変数)	.18	.24
保育園在園年数 (連続変数)	.06	.15
R^2	.02	.13**

* $p < .05$, ** $p < .01$

かった。今回の結果では、量的な違いはあるにせよ、いずれの保育機関においてもほぼ同様の遊びが抽出されていた。このことから学生の記憶に残る遊びの内容には、経験量や印象の強弱において多少の差異はあるものの、大きな違いは見られないのではないかと考えられる。しかし本研究の対象者が、保育者としての十分な遊び体験をもっているかという点、今回の結果を見る限り疑問が残る。現在、子どものみならず保育者養成課程学生の実体験の不足が、保育者となったときの実践力に影響することが懸念されている。このことから、将来、保育者となり遊びの伝承者となるであろう保育者養成課程学生の、遊び体験の少なさは、養成側にとって今後の課題の一つと考える。

では、遊びの指導をどのように行ったらよいのであろうか。ここで遊びの意義について、もう一度考えてみたい。「遊び論研究—遊びを基盤とする幼児教育方法理論形成のための基礎的研究—²⁰⁾」の中で、山田は、遊びの意義について「現在を子どもらしい生き方で生き、その後の人生を充実したものにするための、全面的に発達した人間を保障するものである」としている。この次元で遊びを捉えると、「遊び」について、極めて多様で、内容豊かな指導をしなければならないことになる。これでは漠然としすぎていて、学生からの理解も得にくい。山田はこの点について、遊びの意義を具体的に捉えるためには、心身の各側面から遊びの意義を示すことが必要だと述べている。具体的には、1. 身体的発達の側面、2. 知的発達の側面、3. 社会的発達の側面、4. 心理的発達・解放の側面、の4つの部分的視点から、これらに遊びがもたらす影響について考え、指導すればいいとの見解を述べている。

遊びの教育的意義については、様々な研究者たちによって定義づけがされているが、その中でも、宮原誠一氏の「図解 あそびの事典²¹⁾」で示された意義が、実際の指導に役立てられると考えるので、紹介しておきたい。

保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について

1. こどもは「あそび」によって、自分の能力を全面的に開発していくこと。
2. こどもにとって「あそび」は、無条件に楽しいものでなければならぬこと。
3. こどもは「あそび」によって、身体の発達をとげること。
4. こどもは「あそび」によって、情緒を養われ、知的にも発達をとげること。
5. こどもは「あそび」を通して、一定のルールを守り、協力と義務を遂行することによって、次元の高い楽しみを得、それによってみずからの性格の向上と社会的な人間関係を発達できること。

保育者は、このような目的を達成することができるよう、子どもたちの年齢段階や要求に応じて、具体的な指導案をたてることが求められている。したがって、このような技術や能力をもった学生を養成できるよう、養成プログラムを作っていく必要がある。

今後、幼児期の遊び体験をもとに、子どもに共感的にかかわりながら発達の援助が出来る保育者を養成するためには、実際に子ども達と生活（遊び）をともにし、自分の辿ってきた道を振り返りながら、子どもたちとかかわることが出来るような機会や経験をより多く提供することが求められるのではないだろうか。

文献

- 1) 森ウメ子, 「幼児期時代の思い出の分析—本学第1期生への質問紙調査による試み—」, 『奈良県立医科大学看護短期大学部紀要』, vol5, 2001, pp84-90
- 2) 入口 豊, 「屋外遊びの縮小と学校体育」, 『学校体育』, 50-5, 1997, pp25-29
- 3) 仙田 満, 「こどものあそび環境の変容」, 『教育と情報』, 470(5), 1997, pp12-19
- 4) 総合研究開発機構発行, 『子どもの遊び環境マスタープラン策定計画』, NIRA-OUTPUT-NRS84-22, 1986
- 5) 文部省『時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議』, 初等中等教育局幼稚園課, 平成9年
- 6) 文部科学省『幼児教育の充実に向けて—幼児教育振興プログラムの策定に向けて』, 幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合, 平成13年2月
- 7) 文部科学省『幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために』, 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議, 平成14年6月
- 8) 文部科学省『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について』, 中央教育審議会答申, 平成17年1月
- 9) 厚生労働省『保育所保育指針』
- 10) 文部科学省『幼稚園教育要領』
- 11) Patricia Cranton, “Working with Adult Learners”, 入江直子他訳, 鳳書房, 1999, p.79

- 12) 栗原泰子・野尻裕子, 「原風景としての幼児期—保育者養成課程学生の思い出し記録から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第16巻第2号, 2005, pp13-21
- 13) 馬場桂一郎, 「今, 子どもたちの遊びは」, 『体育科教育』, 47-16, 1999, pp17-20
- 14) 岸本肇・藤木洋子, 「青年女子層の遊び体験に関する研究—幼児教育専攻学生に対する調査をもとにして—」, 『神戸大学発達科学部研究紀要』, 第9巻第2号, 2002, pp343-351
- 15) 森 博文・岸本 肇・栗原武志・廣瀬勝弘・北川 隆, 「幼児・学童期における遊び体験に関する研究—幼児教育専攻学生に対する調査から—」, 『九州女子大学紀要』, 第39巻1号, 2002, pp31-44
- 16) 今井貴志子・堀田瑛子・松本重実, 「学生における子ども時代の遊び体験—保育科学生と介護科学生との比較—」, 『名古屋芸術大学短期大学部研究紀要』, 第37号, 2005, pp1-9
- 17) 鎌田多恵子, 「保育者をめざす学生資質の実態—遊び体験の視点より—」, 『盛岡大学短期大学部』, 第15巻, 2005, pp73-78
- 18) 服部明子, 「子ども時代の遊びと遊び相手の記憶について」, 『大阪青山短期大学研究紀要』, 第30号, 2000, pp21-27
- 19) 文部省『子どもの体験活動に関するアンケート調査報告』文部省生涯学習局, 1998
- 20) 山田 敏, 『遊び論研究—遊びを基盤とする幼児教育方法理論形成のための基礎的研究—』, 風間書房, 1994, pp.13-16
- 21) 宮原誠一他, 『図解 あそびの事典』, 東陽出版株式会社, 1983, p.29
- 22) 河崎道夫他, 『子どものあそびと発達』, ひとなる書房, 1983, pp.310-345